

平成 28 年度第 2 回一関市総合教育会議 議事録

- 1 会議名 平成 28 年度第 2 回一関市総合教育会議
- 2 開催日時 平成 28 年 11 月 11 日（金） 午後 1 時 27 分～午後 3 時
- 3 開催場所 一関市博物館 研修室
- 4 出席者

【構成員】

勝部 修 市長
教育委員会 鈴木 功 委員長
〃 千葉 和夫 委員長職務代理者
〃 小野寺 眞澄 委員長職務代理者
〃 佐藤 一伯 委員
〃 小菅 正晴 教育長

【事務局等】

熊谷市長公室長、佐藤政策企画課長、藤島政策企画課主幹、宍戸政策企画課政策企画係長、佐々木まちづくり推進部長、佐川いきがづくり課長、蜂谷スポーツ振興課課長補佐兼スポーツ振興係長

中川教育部長、小野寺一関図書館長、小野寺教育部次長兼学校教育課長、佐藤教育総務課長、佐藤文化財課長兼骨寺荘園室長、千葉博物館次長、黒井教育総務課課長補佐兼庶務係長

- 5 議題
 - (1) 放課後の子ども対策について
 - (2) 一関市の先人や歴史・文化の理解促進について
- 6 公開、非公開の別
公開
- 7 傍聴者の数
報道 2 社
- 8 会議の内容

(市長挨拶)

今年度第 2 回目の総合教育会議ですが、今回から佐藤委員に加わっていただき、新たな気持ちで臨みたいと思っています。あまり形式にはこだわらずに、ざっくばらんな意見交換をする場にしていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

総合教育会議は昨年度からスタートし、昨年度は総合教育会議の運営について協議するとともに、基本となる大綱の策定を行いました。

また、昨年度の第1回目では読書環境の充実、第2回目では就学前の家庭教育をテーマとして話し合いをしたところです。

今年度の第1回目では、家庭教育を支援する取組について意見交換をさせていただき、もう一つのテーマとして、放課後の子ども対策について話し合いをした経緯があります。

今回は、放課後の子ども対策について、前回に引き続き話し合いをすることになりますが、特にスポーツ少年団活動について御意見を伺えればと思います。

そしてもう一つのテーマとして、お手元に「わたしたちの一関市」という副読本がありますが、郷土の先人として建部清庵、大槻三賢人や千葉胤秀が取り上げられております。郷土の歴史、教育資源がどの地域にもたくさんありますが、それをどう活かしていくかという問題がありますので、意見交換をしたいと思っております。

子どもたちが郷土の先人について学ぶことによって、郷土に誇りを持てるようになるのではないかと。それをやっていくのは社会の私たちの役割でもあり、さらには、地域の力、地域力を示すことにつながるのだらうと思っております。

地域力というものこれから注目されていくものと思っておりますが、地域の人全てが力を発揮しなければならない。高齢者の方々もまだまだ引退するのは早い、もうひと頑張り力を貸してください、という場面がこれからもっと出てくるのではないかと考えます。

そういう仕組みを作っていくために、私たちが何をしていかなければならないか、その辺についてもざっくばらんに話し合いをしたいと思っておりますので、時間は限られますが、型にはまらない懇談の場としたいので、よろしく申し上げます。

(1) 放課後の子ども対策について (進行：教育長)

教育総務課長：資料1、2により説明

(教育長)

フリーで話し合いをしていただければと思います。現状についての説明がありましたが、現状を見ながら、あるいは普段考えていることなどありましたらお願いします。

(市長)

よくスポーツ少年団の大会の開会式に行きますが、最近は混成チームが非常に目立ちます。先日は小学生女子のソフトボール大会でしたが、前年に優勝したチームが今年はチームを組めず、3つのチームが1つになっていました。種目によっては増えているものもあるので一概には言えませんが、スポ少の団員の数が減ってきているのではないのでしょうか。

(教育長)

小学生でスポ少に入っているのは3割くらいで、団員の数は過去5年間減っていませんが、校長先生などに聞くと、スポ少に入る人数の確保が難しく、団員確保のため低年齢化して、小学校1～2年生も入っているという実態があるようです。

(教育委員長)

小学校と中学校の関係について、例えば、小学生は卓球教室がありますが、中学校に行くと部活

がなく、人数的な問題や小・中のつながりの問題があるので何とかならないか、という話をされることがあります。

保護者にとっては、子どもが希望する部がある学校に行きたいということで、住所等の問題を整理して学区外の学校に行っている事例もない訳ではないということもあり、解決方法は見えませんが、問題が含まれていると感じます。

データから見ると、行政からの支援として、保護者やスポ少関係者から一義的には金銭的な支援が望まれています。一関市の状況を見ると、他市よりも支援実績が多い部分があり、支援体制を取っているように思います。

ただ、声の大きいのは強いチームといますか、練習試合を多くやり、遠征して試合をし、大会にいくつも出る、という強いチームでお金がかかっていると思いますので、そこに合理的な理由を見つけて、公平性を欠かないようにしながら、金銭的な支援について工夫できないかと感じました。

例えば、一関は岩手の南端にあり、県大会が二戸や久慈で行われる場合に盛岡とは事情が異なるので、例えば 100km を超えた場合など会場が遠い場合に、ガソリン代などについて何か支援の方法がないかと思いました。

(千葉委員)

スポ少への支援について、経済的に厳しいところは出てくるとは思いますが、私が聞いている2つの事例で共通するのは、親がやらせたくないということです。2件をもって一般化することはできませんが、子どもがやりたがっても、土曜日や日曜日が潰れて親の時間が無くなることから入らせない、という話を聞いており、生活の多様化によって親の意識が変わったのかな、と思います。

我々の頃は、スポーツに情熱を傾けてくれれば非行に走ることもなく、健全に育つという認識があって、自分も子どもをスポ少に入れて追っかけをやったものですが、土曜日や日曜日の遠征の時に車を出してくれ、と要請されても対応できないから入れるわけにはいかない、というところもあるのかと思います。

2つの例をもって一般化することはできませんが、経済面よりもそちらの要因という認識を持っています。

(教育長)

スポ少に入らせたくない、という部分のお話でしたが、近くの親御さんやご自身の経験で何かありましたらお願いします。

(小野寺委員)

スポ少に入れている両親の話を伺うと、週3回放課後に送り迎えがあり、夜は8時まで練習するというので、親が時間的に厳しい中で送り迎えしなければならないので、休みが取れないと送迎できないことになります。

親御さんとしては子どもの気持ちも分かるのですが、親の生活と子どもがやりたいことがマッチしないところがあり、難しいところだと思います。

(佐藤委員)

スポ少の支援については他の自治体に比べて充実しているという印象を持ちました。バスの利用について、現状以上の支援の要望にはなるべく柔軟に考えるべきだと思いますが、予算的に充実させるためには課題があるので、何かしらの対策や工夫が必要だと思います。

合同チームの事例がありましたが、団員数は少なくとも団体数が多く、個々の団体に細かく支援をしている状況であろうと思います。今後、学校規模が適正になっていくことに伴って、スポ少の組織についてもより適正な規模になることで、支援が難しかったところへ踏み出していける可能性があると思いました。

私たちが子どもの頃は、学校対抗の野球大会は先生が指導しており、他にスポ少があつて、学校教育活動と一貫したようなスポーツの経験ができました。

放課後子ども教室では勉強やスポーツを推進することになっています。ただし、スポーツとしていますが、その趣旨を聞くと鬼ごっこか遊び程度のものと聞いており、スポーツという用語を入れるのであれば、もう少しスポーツらしいものにして、より学校教育活動の一環に含められるものにしていけないかと感じました。

(教育長)

先ほどから支援ということが話題となっていますが、学校統合が進んで、例えば千厩の小学校5つが1つになるという中で、既にスポーツ少年団が先行して1つになっています。それに伴って、スポ少への送り迎えの問題があつて、それに対する支援はなかなか難しい部分がありますが、支援という観点で何か考えられるものはないでしょうか。

(市長)

スクールバスの話がありましたが、原則論を貫けば目的外使用になるということで、そもそもスクールバスを購入して学校に配置した段階で、それ以外の目的には使えないという枠にはまっています。一方で、地域という面でいえば財産であり、スクールバスは通学の時間帯だけなので、空いている時間や休日に活用する方法というのは、議論していくテーマになると思います。

実態として、父兄の方々が自家用車で送迎したりしていますが、安心して試合会場に行ければよいと思います。

指導者と交通手段の問題はこれからの大きな問題です。強いチームになるほど遠征も多く、全国大会に行くとなると車での移動ではなく、列車で移動しなければならず、親からすると財布がいくらあっても足りないという実態は、これから大きな問題になっていくと思います。

(教育長)

休日に車を出すことや、親の送迎の大変さなどがありますが、スクールバスが休日に一回でもその代わりをしてくれればいくらかでもプラスになる部分は確かにあります。スクールバスが実際に使用できるのかという具体的な部分になり、色々な条件がありますが、可能性を追求しながら検討することが一つの方法です。

(小野寺委員)

一関市内のスクールバスは、全て国の補助が入っているのでしょうか。

(教育総務課長)

全て国の補助金を使っています。

(※後刻、一部補助を受けていないものもあります、に訂正)

(千葉委員)

市長判断で利用できることとすることはできないでしょうか。

(市長)

市長判断といえれば何でもできることにはなりますが、しっかりした理由付けがあれば大丈夫ではないかと思えます。

(千葉委員)

「バス等の公共機関のない地域または交通機関の利用が著しく困難な地域」という規定を相当に拡大解釈しないとなかなか該当しませんし、拡大解釈するとしても、最後は県を通じて文部科学大臣への届出があるということで、相当に難しいと感じますが何とかなるものでしょうか。

(教育委員長)

県内で「バス等の公共機関のない地域または交通機関の利用が著しく困難な地域」に該当するところがどこか実際にあるのかと思いましたが、どうでしょうか。

(教育部長)

一番想定されますのは、よくある例で申し上げると、大東では市営バスがスクールバスの代わりになっていますが、逆に、スクールバスを住民の利用に供することができることになっています。

路線バスはないが、スクールバスがあるので、スクールバスに大人も一緒に混乗できる仕組みがあり、それが想定されているということです。

(教育長)

いろいろな捉え方をしっかりとしながら、可能性を追求することが必要で、庁用バスを活用しているところもありますし、いろいろな部分を見ていく必要があると思えます。

(市長)

スクールバスは、子どもたちの授業中は空いています。他に、地域の中でどういうものが空いているのかと考えると、建設会社の作業員を運ぶバスが現場に行ってしまうと、作業が終わって帰ってくるまで空いていますが、知らないでそこに置かれていることはもったいない話です。

どうやって使うかについてはいろいろと問題もあります。勝手に人を乗せて走れない場合もあります。そこは地域の中で仕組みを作っていくかなくてはならないと思えます。地域の人口が減っていく中で、地域の中で効率よく物事を回していくのに知恵を出し合っていかなければならない時代に入っていくのだらうと思えます。

スクールバスにつきましても、本来購入した時の目的にそぐわないものはだめですけども、例え

ば使いたいとなったときに、運転手をどうするかとか、運転手をスポ少で雇ってバスを借り上げたらどうなるのかとか、様々なことを考えていけないと思います。

できないと思うとできない理由ばかり考えるものですから、逆に考えればいい知恵が出てくるのではないかと思います。

(教育長)

親の負担については指摘されていますので、その中で、具体的にスクールバスとかの有効利用ができないか、というところをもう少し研究していく、知恵を絞っていくということかと思えます。

それでは、懇談の前半はここで終わりたいと思います。

次の2つめのテーマに入ります。一関市の先人や歴史・文化の理解促進について、事務局から資料の説明をお願いします。

(2) 一関市の先人や歴史・文化の理解促進について (進行：教育長)

教育総務課長：資料3、4により説明

(教育長)

非常に広い範囲の話でした。昨年度定めた大綱の中にも、基本方針の3番目として「郷土の歴史と文化を誇りにし、未来を創造する人づくり(時間軸の人づくり)」ということで位置付けておりますし、教育振興計画の中でも歴史と文化を大きく取り上げております。

これについては様々なお考えもあると思いますので、フリーでお話いただければと思います。

(市長)

今年の8月に千葉県千葉市で千葉氏サミットに出席しました。千葉市ができるきっかけが千葉常胤で、頼朝が鎌倉幕府を作った際に貢献した方のように、頼朝が全国に持っていた領地を常胤に分け与え、千葉六党と呼ばれる常胤の子6人が領地を引き継ぎ、全国に千葉一族がおります。

残念ながら一関で千葉を名乗っている人が多いですが、その6人の中には入っていない、というよりは資料がないのです。秀吉に打ちのめされて何も残っていない。しかし、千葉氏を名乗っている人が多いということで、奥州千葉氏としてサミットに招待されました。

サミットでは、千葉市長が、子どもたちに郷土の先人についてしっかりと伝えるのは自分たちの役割なので、子どもたちの誇りに感じてもらえるようにつなげていきたい、という意気込みで、簡単な漫画の本を作ったほか、難しい本を子ども向けに編集してもらった作業をやっていききたい、図書館に常設コーナーを設けたい、など様々なことを考えており、そのようにやっていけば、子どもたちの郷土の先人に対する理解も深まると感じました。

そのような「素材」といっていいのかわかりませんが、一関は結構数が多いと思います。3～4年前に、東北大学の先生が仙台藩の学者番付を作りましたが、東西の両横綱が建部清庵と芦東山です。芦東山が東の横綱で建部清庵が西の横綱、そして大関・関脇にも一関出身の人が並んでおり、これは、やはりせつかく先人の方々の名前があるのだから、何かやった方がいいのではないかと思います。

また、大槻玄沢について、私が驚いたのは、忠臣蔵サミットが岡山県の津山市で開催されて出席

した時に、歴史資料館を案内されて行ってみたら、入口から玄沢先生の名前が沢山出ていました。当時、津山藩のお医者さんで江戸に出ていた人が宇田川玄随という人で、漢方医だったのが、大槻玄沢に影響を受けて蘭学に転じたのですが、相当影響を与えた人物ということで大槻玄沢が紹介されていました。

あまりにも名前が出てくるから驚きましたが、そういう影響力を持った人も多くおりますので、大人の我々だけで考えて勉強するのではなく、子ども達にどう伝えていくかということも地域の中でやっていかなければと思います。お年寄りの方々が地域社会の中で、子ども達に語っていくなど、何かやれないかと思います。

(佐藤委員)

資料を2つ持ってきましたので配布します。(「老松ふるさと学校 2009 事業報告書」、「一関尋常中学校落成式賀章」を出席者に配布)

(教育長)

配布する時間を利用して説明します。お手元の「わたしたちの一関」という社会科の副読本に一関の先人、偉人が7人ほど載っており、小学校の3～4年生がこれを学習しています。

(千葉委員)

副読本なので、これを学習することはないのでしょうか。

(次長兼学校教育課長)

この副読本も使って学習するという事です。

(千葉委員)

百科事典的に、調べたいことが出てきたときに見るのでしょうか。

(次長兼学校教育課長)

身近な地域について、教科書には載っていないので、一関市について副読本を使って学習するという事で、市内の先生方に作成していただきました。

(教育長)

それでは、佐藤委員、簡単にまとめてお願いします。

(佐藤委員)

市広報の11月15日号の一関版に、「大槻玄沢の生涯と国際リニアコライダー誘致後の一関」を熱演した山目市民センター主催の英語劇があったという記事がありました。大槻玄沢が成人になるまでを演じ、最後に国際リニアコライダーの誘致が実現した未来を描写したような劇ということで、まさに温故知新といえますか、大槻玄沢の精神から今一関が目指す国際リニアコライダーにつながるようなことをやっている。一関らしい学習、古きを訪ねて今につなげていく、良い事例かと思って拝見しました。

配布した冊子のほうは、今から7年ほど前に地域おこし事業で、老松地区の地元学のような行事をやったときのものです。ちょうど東京の渋谷に渋谷大学というNPOがあって、渋谷の街中を全部大学みたいに、色々なところで授業をやるようなやり方で若い人が参加していたということで、それを地元でもやってみたいと思って4か所で講座をやりました。

162名の延べ参加者がありましたが、老松という地区は400世帯、1,500人くらいの規模で、4回のうち3回出席して修了した方が22名、皆勤の方は12名ということで、内容的には良い企画をしたつもりでしたが、老松学だけではやはり規模的にも小さいものになってしまうので、もう少し規模の大きな、今の一関全体を楽しく勉強できるようなもののほうが長続きするのではないかと、という勉強になった行事でした。

もう一つの資料につきましては、一関尋常中学校、現在の一関第一高校の落成に当たって、大槻文彦が祝辞を贈ったもので、これにつきましては、大島英介先生の「遂げずばやまじ 日本の近代化に尽くした大槻三賢人」という、岩手日報に連載した本の中にも紹介されています。この文章ですが、大槻文彦は県下で二番目の中学校ができることを非常に喜んで祝辞を書いたわけですが、主要な部分は、藤原三代はしばらく措いて、で始まり、一関、東磐井、水沢の先人をそれぞれ紹介して行って、古のような頃から優れた人材がいるということをまず振り返って、そういった古人に負けないような生徒になってもらいたい、ということ。また、終盤では、学校だけに教育を任せるのではなく、家庭や社会の人たちも学校をぜひ支援しなさい、ということで結ばれてあって、まさに今一関が目指そうとしているものは、大槻文彦が一関に学校ができるときに述べた想いと通じるものがあるのかと感じております。

また、常々こういうものがあつたらいいのではないかと感じていますが、遠野物語誕生100年の平成22年に遠野市に遠野文化研究センターという組織ができました。これは、図書館や博物館を活用しながら一つの研究センターを立ち上げたものですが、一関学や一関に関する文化などの学習や研究を行うセンターや研究会のようなものを、博物館、図書館、個人、団体がうまく連携して、既存のものを有効活用していく仕組みがつかれないだろうかと思えます。

博物館の展示の中でも和算のコーナーがあり、地域の数学の学力強化には直接つながらなくても、数学への取組の意識を高める意味で、博物館の取組を活用して、ILC推進のまちにふさわしい科学や学問を尊んできた歴史を共有していけたらいいのではないかと、具体的にどうしていけばいいかは課題がありますが、感じているところです。

(教育委員長)

一関でも、先人教育について教育委員会の中でも課題として受け止めて、議論を始めている段階です。

10月に県の教育委員長研修会がありまして、その時の発表内容の1つが盛岡の先人教育の取組でしたが、ヒントになりそうなことが沢山あるという思いで帰ってきました。

盛岡の場合には、平成19年からが第1期で、今は第2期に入っているということで10年の積み重ねがあり、すぐにここまでは到達しそうにないな、という段階に入っていると感じました。

取り上げているのは、原敬、新渡戸稲造、米内光政、金田一京助、石川啄木の5名で、盛岡市全体で学習しようという部分はかなり具体的になってきていて、例えば学年ごとの目標を作っているようで、1年生の目標は名前と顔を覚えること、何をしたのか、というところは2年生、3年生になると石川啄木、新渡戸稲造あたりは難しくなるので高学年で、というように、学年ごとの系統

性を作りつつあります。

また、学校ではどの部分でやるか、総合的な学習なのか、教科、特別科、その他なのかといった位置付けをどうすれば進んでいくかということまで進んでいるようです。

最初はおそらく講演をやるか、散発的な取組ではなかったかと思いますが、それを学校教育にきちんと位置付けて、時間やカリキュラムをどうするかといったあたりまで話が進んでおり、長い時間をかけた取組があるのだろうと思いました。

また、市の立場や教育委員会でやっていることをみますと、学校に掲示して、写真と顔がいつも見られるような先人カレンダーの作成を教育委員会でやっています。学校、教育委員会、博物館の学芸員の果たす役割は何か、また、顕彰会的なもののエネルギーをどう引き出すか、身近なところでは盛岡市ですが、先進的な取組に学びながら、どういう段階で手を付けていくかというあたりを研究する必要がありそうだと感じました。

一つの例として、例えば芦東山については大東地区の小学校で、三賢人については一関の中里小学校で学習の進め方を先行的にやってみるとか、模範となるような先行的取組を作り上げないと普及は難しいのかという気がしています。

(教育長)

一関でもことばの3つの柱の一つがことばと先人ということで、色々と取組を始めています。学校教育課が中心となって、いま8割くらい出来上がっていますが、ことばのテキストという、将来的には小学生全員がそれを持って、毎日10分ずつそれを音読するというテキストを作っています。

その中に、一関の8人の先人、大槻玄沢、大槻文彦、建部清庵、千葉胤秀、芦東山、宮沢賢治、松尾芭蕉、青柳文蔵を4ページずつ入れ込んで、中・高学年の子どもはかならず読むという体制を作ろうとしており、今後の展開が期待できると考えています。

もう一つ、先ほど千葉胤秀の和算の話がありましたが、県全体がそうですが、一関市は学力的に算数・数学はどうしても難しいところがあります。

千葉胤秀がいた時代は江戸の後期ですが、3千人以上が和算に親しんだといわれており、日本にこのような地域は他になく、和算をもう一回復活させて学力向上につなげたい、和算をルネッサンスしようということで、和算の「ルネッサン算数」という語呂合わせをして、校長先生方にも話をしているところです。

各学校で算数、数学についてたいぶ意識的になってきて、それぞれの取組が行われる中で、先日の県の学習状況のテストでは、小・中とも県平均を超え、小学校については算数に引っ張られる形で全教科県上位になっているという状況で、和算というのは学力向上にとっても非常に有用であると感じております。

(市長)

和算につきましては、一関の姉妹都市に福島県の三春町がありますが、そこも和算が盛んなところですよ。

姉妹都市として、何かの行事の時に行き来して交流を深めるだけでは物足りないと思っていて、市長になって最初に三春に行った時に特産品の三春駒を資料館で見せていただき、北関東の和紙を使っているとのことでしたが、一関にも和紙があるということで、その次の年に東山の方々が楮の苗を持って行って三春で植えて、今はそれが伸びて収穫できるようになっています。

それが姉妹都市としての新しい展開で、元は旧一関市と三春との関係でしたが、合併後の一関市全体で三春とお付き合いしています。

和算も一つのキーワードとなりますので、姉妹都市だからということではなく、もっと三春とのつながりは広げていけると思います。

子どもにどう教え伝えていくかということ考えたときに、大人が地域の中で子どもに自然に語ってあげられるような環境があれば、ものすごく理解が進む感じがします。大人にどうアプローチするかは難しいところですが、それが上手くいけば効果が上がるのではないかと思います。

今年の地ビールフェスティバルの時に、実験的にチケット売り場と各テーブルにパンフレットを置きました。日本で最初にビールを飲んだのは大槻玄沢です。フランス語の百科事典を和訳したのが大槻玄沢で、その中でビールについて4ページくらい書いており、その中で「たいへん苦いもので、よくこんなものが飲める」などと書いています。日本で最初にビールを飲んだ人のゆかりの地で、今こうやって地ビールフェスティバルをやっているという縁を結び付けていくようなアプローチをして、大人から子どもに郷土の先人を教えていくのも一つの方法かなと思います。

(教育長)

いつか算数合戦をやってみてもいいかもしれませんし、初めに、例えば博物館の学芸員が向うに行ってお話することなどができるかもしれません。

(教育委員長)

学校現場にいたときに、例えば大東では芦東山ですが、勤務している先生はあちこちから来るので、聞いたことがないというのが実際のところですよ。

いろいろな出身の方が教員となって着任するので仕方がないことですが、先人教育について、教職員をどうするかが重要な取組の柱です。知らないから不勉強とは言いかねるので、教員向けの研修や学習などを組み立てることが、進めるうえでの基本であると思います。

博物館が公開講座をやっていますが、夏休みや冬休みなどの長期休業中に、博物館や記念館が教員向けに公開講座をやって、長期休業中の研修課題の一つにきちんと位置付けるとか、初任者研修の1コマに郷土学習的なものを位置付けるなどの必要があると思います。

既に実施しているのが出前講座で、学校から依頼して、博物館から出向いて話をしていますが、このように組み立てて、次々と研修を深めるチャンスを先生方に提供することが大事なのかと思います。

教育委員会や学校で、私が現場にいたころにあって今は無くなったのは、例えば東山に着任した先生は、半日くらい使って地域研修に参加することによって、学区内の理解を短期間に深めるということがありましたが、今はどこでもやっていません。先人、歴史・文化の学習を展開しようと思うのであれば、先生方の研修のチャンスを作ることが必要ではないかと思います。

(千葉委員)

一関で地域の先人についての学習を結構やっているな、という感想を持つ一方で、ここに生まれたことに対して誇りを持ち、また帰ってきたいと思われるような地域にしていきたいと思うと足りなさすぎると思います。大槻文彦や千葉胤秀について調べたり、学習していることになっていますが、一人について学習して、一関の先人について学んでいるということにはならないと思います。

教育長からありました、8人くらいの先人について学習するという話はすごく良いと思います。調べ学習はすごく良いと思いますが、講義的なものではなく、調べたらそれをまとめて発表するところまでやってほしいと思います。まとめるということは思考力が磨かれますし、発表することによって表現力、発表力も磨かれます。例えば1つのクラスで4人位のグループで分担して先人8人の調べ学習をして発表し合うことで、7人分の発表を他の人が聞いて学ぶことができます。講義式でやったものよりは頭に入ってくると思いますし、他の人たちの発表の仕方を見て、上手い工夫をしているのを見ることは将来のプレゼンテーション能力にもつながり、社会に出てからも、生きて働く力につながるのではないかと思います。

学習して発表までする、ということまで教育委員会が決める訳にはいかないと思いますが、どうでしょうか。

(教育長)

実際に各学校でご意見のような形でやっているところは多いです。ただし、他校と交流するという場は今までにありませんので、今後考えていかななくてはならない部分です。

(市長)

オーストラリアのセントラルハイランズ市で、市内の小学校、中学校及び高校が一堂に集まって発表会をやっています。講堂のような大きな場所で、各学校から代表が5～6人ずつ来て発表して、それを皆で聞いて、お昼はちゃんとした料理を一緒になって食べる、ということを毎年やっています。

子どもたちが主役で、先生たちは補助をしていましたが、見ていて清々しい思いをしたところです。そのような場を作ってあげるというのも一つのやり方かもしれません。

(教育長)

先人学習の集いで食事があると、子どもも学校も喜んで来るかもしれませんね。

(小野寺委員)

教育委員長の話された先生方の研修につきましては、同じように感じています。歴史に興味を持つ先生も、そうでない先生もいるかもしれませんが、先生方が興味を示さないと子どもたちに伝わらないし、千葉委員の話された、調べて、まとめて、発表まで行うということは非常に必要だと思います。

一覧表では、地域の先人の学習について空欄のところもありますが、同じ一関なので、33校の学校が全部同じように、一関に関わる先人の勉強をすべきだと思いますし、自分たちで調べたことを力強く発表できると思うので、できれば学年毎でもいいので、学校同士で発表し合う場所を設けてあげるのも一つの方法だと思います。

(市長)

照井堰が世界かんがい施設遺産に登録されましたが、一関から平泉にかけて照井堰に関わる学校がありますので、4～5校で連携して共同研究のようなことができれば、かなり効果が上がるのではないかと思います。

(教育長)

ありがとうございました。沢山ヒントをいただいたように思います。
時間となりましたので、このあたりで先人についての懇談を終わります。

9 担当課

市長公室政策企画課